

# 大阪 ■ ■ 哲学学校 ■ ■ 通信

No.48 (WEB 発行版) 2021.1.30.

大阪哲学学校世話人会 Copyright©,2021

【郵便振替】01170-1-81313 大阪哲学学校

【E-mail】oisip@mac.com

【Home Page】<http://oisip.jimdo.com/>

【代表者・編集発行者】

平等 文博 (代表世話人)

---

## コロナ禍での大阪哲学学校

平等 文博

大阪哲学学校が開校してから、今年で35年になる。その間、1995年の阪神淡路大震災で4ヶ月ほど休止を余儀なくされた以外は、「継続は力」との思いで活動を続けてきたが、今回のコロナ禍での休校は、昨年3月下旬からもう10ヶ月にもなる。

震災被害は遮断された交通の再開など、復旧・復興の進捗が比較的に見えやすかったが、目に見えないウィルスによる脅威が終息する見通しは、政治の無能・無策という人災的側面も重なって、今に至るも一向に立たぬままである。

感染の可能性を低減するため、企業でもリモートワークが導入されているが、大学もこの一年、入構制限がとられてキャンパスは閑散とし、対面授業はインターネットを使ったリモート授業に大半が切り替わったままである。にわか仕立てという問題もあるのだが、手間暇のかかる割には教員と学生双方にストレスや不全感が小さくない。

私が小学5・6年の時の担任の先生は、「人の話を聴くときは、その人の目を見なさい」と教えてくれた。そのことの深い意味まで小学生には分からなかったが、人と人とが意思を通わせる際の「ことば」にならない微妙で複雑な、時には裏腹な思いを感じ取る重要な回路がそこにあるだろう。

哲学するとは、抽象度を上げて普遍のレベルで思考する知の営みではあるが、哲学学校は生活と共にあった哲学の本来に立ち戻り、「生活現場」の具体性との境界面で哲学することを提唱し模索してきた。専門家の学会と異なり、多様な生活／人生を背負う市民が集い「対話を通して哲学することを学ぶ」哲学学校の存在意義はそこにある。

コロナ禍が長引く中で、学会などから講演会・研究会をリモートで開催するとの通知が届くようになった。しかし、哲学学校だからこそ、直に目を合わすことのないリモートでの開催に踏み切れずにきている。とはいえ、いつまでも休校を続けるわけにはいかない。このWEB版「通信」発行を機に、次善の策ではあるが、リモート哲学学校へと一歩を踏み出す潮時なのであろう。

## 「例外状態、例外社会」

### から考えてみる

脇田 倫司

コロナ禍の中での移動の制約、大学・短大の遠隔授業による不安全感など、閉ざされた日常の暮らしが続いています。不定期の参加でしたが、大阪哲学学校での学ぶ場に接したことで、視野が拡大し多くの知的刺激を受けてきました。特に毎年開催の「知の歴史シリーズ」では、テーマや課題図書の設定・提示から学びの触発を受ける機会が多くあり、感謝ばかりです。コロナが終息しましたら、本年もよろしくお願ひします。

2020年には、知人やF Bでつながりのある人との関係で、雑誌投稿の機会を得ることでき、そのうちの一つで「相模原（やまゆり園）殺傷事件」（雑誌『飢餓陣営』52号）が掲載となりました。その雑誌は「特集コロナ・やまゆり園・生権力」がテーマで、いくつか気になる論考に巡りあえました。

特に、インタビュー『笠井潔氏に聞く』は、かつて『テロルの現象学』（1984年）の次の社会思想評論『例外社会』（2009年）に関連したもので、＜戦後社会の欺瞞と「本土決戦」/「没落する中流」と暴力化の問題＞が副題でした。（最新刊は、『例外状態の道化師』（2020年）

笠井潔は、私には疎い探偵小説では有名な作家で、全共闘世代に属し、「連合赤軍事件」を読み解くことを作家としての出発とし、思考のモチーフにしてきて、また「マルクス葬送派」の一人とも言われています。長崎浩や小坂修平と共に、私自身が全共闘運動の分野で注目してきた一人です。

雑誌の論考と『例外社会』の本から、①「例外状態、例外社会」の今、②21世紀「本土決戦」の意味、③中流層の崩壊とその落ちこぼれた層の「例外存在」と暴力の是非について、以下に要約します。

①一つ目は、（カール・シュミットのいう）「例外状態」というのは、憲法秩序が一時的に停止された状態で、大混乱が社会を襲うとき、戦争や内乱・革命や暴動、大災害などで、平時の法秩序が維持できなくなること。例外状態では、議論による利害調整という頹落した議会主義的政治ではない本来の政治、真の政治が問われざるを得ない。ただ、20世紀には、「例外状態」の意味が変化し、憲法上の「例外状態」とは区別して、「例外国家」と呼ぶ。古典的な例外状態に対して、20世紀では例外状態が恒常化し例外国家が進行していく。（※シュミットは、一時ナチスに協力、その後失脚、戦争犯罪では不起訴に）

この例外国家は、戦争が終わって平時になっても、20世紀では例外状態が国家規模で永続的に推進されているし、この21世紀になっても、日常化された例外状態は継続され、強化されている。

わかりやすく言えば、現在の安倍一菅政権における、法治主義・法の支配でなく、民主主義の実質的な形骸化の人治主義が一見合法的（しかし正当性は？）にまかり通るような状態をも意味してくる。特定秘密保護法や共謀罪の成立以降に見られる相互監視、監視カメラ、セキュリティの論理など。今回のコロナ禍の日本社会の自粛社会・自粛警察は、例外社会のトップランナーといえる。

②二つ目は、今の時代の膠着した難問(安保、天皇、沖縄、平和憲法)の起源・原因は、「本土決戦」を最後まで戦わなかったところにあり、その解決は戦後日本で自前の本土決戦を戦い抜くしかない、という。文字通りの戦いや本土決戦に現実性はないが、21世紀の「本土決戦」の現実形態は何かを、笠井は「移民を無制限に入れることだ」という。なぜか。国家の統治形態ではない「本物の民主主義は、さまざまな国や地域から吹き寄せられてきた、難民のような人々が否応なく共同で生活する場所・共同体のようなところで生まれる」という、アナキスト人類学者デヴィット・グレーバーの言から。当然摩擦は起きるだろうし、排外主義は今以上に過激化・暴力化していく。「移民が俺たちの仕事を奪っていく」という危機感から、本物の排外主義、ヘイトスピーチ・ヘイトクライムが多発し始めたときに、それを実力で阻止するために闘うことこそ、「21世紀の本土決戦」と笠井は言う。本土決戦を最後まで戦うということは、徹底的な敗北を引き受けるということ。「1968年」に全共闘派だった同世代は、大半はリベラル化し、国家の存在を前提に、国家の範囲で物事を考えるようになったが、自ら(笠井)はリベラリストではなく、ラディカルであることをやめるつもりはないと。求められているのは、民衆の「自治/自律/自己権力」運動で、国家そのものを下から解体していく方向性だと。

③三つ目の中流層の崩壊については、マクロの淵源として、19世紀型の国民国家戦争(保護・限定された秩序戦争)、20世紀の第一次世界大戦以降の「総力戦体制の世界戦争(殲滅)」、21世紀の世界内戦(9.11テ

ロ等)への変遷過程がある。20世紀前半の総力戦体制と20世紀後半の福祉国家(大きな政府)は連続性があり、世界戦争への必要性が失われたとたん、新自由主義(小さな政府)が出てきたわけであると。そうなると、福祉国家の解体と公共部門の民営化、労働力の非正規化と生活の不安定化や貧困化(見えない貧困)、中流の解体と没落、富の偏在とアンダークラスの形成など、社会問題化してきたもろもろは、世界内戦の必然的な産物であった。格差・貧困との闘争に際して、20世紀後半の福祉国家や「豊かな社会」の復活を待望するのは、以上の構図からして、夢に過ぎないということ。

こういう状況の中で、植松(相模原事件)、加藤(秋葉原事件)、宅間(池田小事件)の事件を、この社会は確実に招いたとみたほうがいい(0と100ではないが)。中流層の分解、親は中流、子どもは中流から脱落。その存在は、「例外社会」で、「歩く例外状態」「例外人」と笠井は呼んでいる。例外社会の側に立とうとして、自分を(役立たずではなく、役立つ側に)秩序の側に、正常の側に、差別される側でなく、差別する側に置き続けようとして、自分の将来の姿(周縁)かもしれない人々を暴力的に排除した。植松は、権威主義的で威圧的、暴力的な権力者に憧れ、それと同化したいという観念的欲望もまた、没落する中流層には半ば必然的であると。

笠井は、「暴力と非暴力を二項対立的にとらえることは間違いです」と。「ガンジーの非暴力としての暴力」もあり得る。「とにかく暴力はいけません」という発想は、潜在化されている抑圧的暴力の容認にしかない。抑圧の暴力もあれば抵抗の暴力もある。

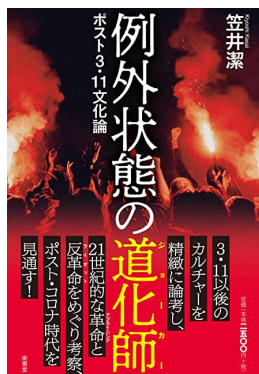
腐敗した暴力もあれば、浄化する暴力もある。それがいかなる暴力であるのか、いかなる結果を目指し、いかなる効果をもたらしたのか、それを個々の事例に即して慎重に吟味することでしか、その暴力行為の是非は判断できません」と。

以上のように、雑誌のインタビューを契機に『例外社会』を読んだことで、「戦争論」の総力戦以降における捉え方の延長線上で中流崩壊と格差・貧困との連動を考えるとの重要性や、カール・シュミット『政治神学』『パルチザンの理論』、アガンベン『例外状態』『ホモ・サケル』を読んでいくきっかけができたこと、今回の誌面では触れることはできなかったが、ユダヤ教・キリスト教の「終末論・予定説」、千年王国主義、群衆論、ベンヤミンの「神話的暴力・神的暴力」、フーコーの「生政治・生権力」など、知的刺激展開の更なる糸口を多く見出していきたいと思っています。

その意味でも冒頭に記した大阪哲学学校での「知の歴史シリーズ」など、アクチュアルなテーマのもとに、コロナ終息後の再開を望んでいます。

グローバリズムは何をもたらしたのか？  
非正規雇用者とワーキングプアの激増、  
サブカルチャー的な知性の台頭、反テロ  
戦争と世界内戦——。「ゆたかな社会」が  
終焉したとき、人間は群衆に変貌し、未  
曽有の例外状態が到来する！  
21世紀、日本社会の現状を世界史的なレ  
ベルから把握し、新たな社会思想の潮流  
を展望する、著者渾身の本格長篇評論。

笠井潔  
例外  
社会  
神話的暴力と監視 文化・音楽



## 明るみにされた

### 現代型パノプティコン

水谷 忠央

昨今、猛威を振るう新型コロナウイルスは、人間の脆弱性を浮き彫りにした。

テレワークやリモートワークの普及は、停滞した日本に新テクノロジーの導入を余儀なくさせた。この波は世界的に波及し、人類の進歩を促したと言える。しかし、この正の側面は、コインと同様に負の側面をも持つ。

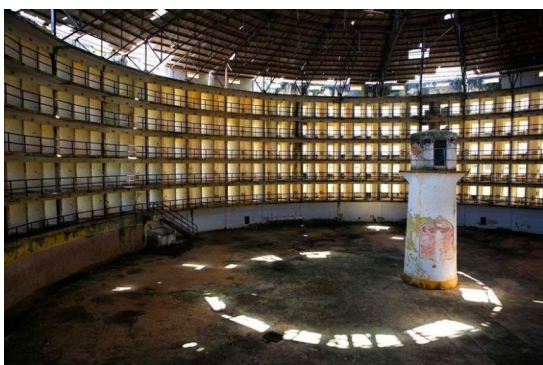
今や笑い話にすぎないことが大真面目に行われている。Skype や Zoom 等のオンラインコミュニケーションツールにより、自宅にしながら社員同士の話し合いが可能になり、海外にいる人ですらもほぼ無料で手間暇もかけずに交流できるようになった。しかし、これらのツールは、カメラさえあれば相手の様子を随時知ることができる。また、画面共有機能を使えば、社員や部下の仕事の進捗状況を事細かに把握することもできる。私が耳にした事例では、テレワークなのに、スーツ着用を義務付ける企業もある。この傾向は、ビジネスに限らず、教育現場でも起きている。教師は、生徒が授業を真剣に聞いているのかをカメラで監視する。しかも、生徒は制服を着用しないといけない。

この状況は、ベンサムが考案したパノプティコンにそっくりではないだろうか？ オンラインコミュニケーションツールは、カメラによって監視ツールと化す。監視される者に、不必要な義務を課す。義務や仕事を忠実に果たさなければ、制裁が下されたり、評価を下げられたりする。

まさに、権力を笠に着て、カメラ一つで複数人の行動を規制している。インターネットを利用しては、「現代型パノプティコン」と呼べるだろう。

ライアンは、20年も前からこのような状況を予想していた。「監視が近代生活の基軸的特徴である。私たちは、多くの日常的なやり取りや業務の効率性・利便性をそれに依存している。…流動性・速度・セキュリティー・消費者の自由に価値を置く社会において、政治的・経済的な諸関係が構築されていく複雑な過程の、その結果なのである」と。では、なぜ監視社会がここまで浸透し、市民にとって受け入れられているのだろうか？ライアンは、「私たちの日々の活動の痕跡を辿る諸々の機関・組織は、リスクの管理を目指している。…監視活動を、現代社会の主要特徴に、つまり、不確実性を削除し、結果を制御しようという欲望に結びつける」と述べている。監視には、経済の不確実性を下げ、人間の行動の予測不能な結果を避ける狙いがある。恐ろしいのは、この監視社会では、「監視体制による束縛や、まして管理を感じている人も減多にいない」ことである。

しかし、現代の監視行為は、経済的不確実性への対処のためだけなのだろうか？もしそうであるならば、事細かに監視などせず、成果物による評価で十分ではないか。



百歩譲って、目標達成できない者を見張るくらいでよいではないか。現代型パノプティコンには、経済的不確実性への対処以外の理由もある。

では、その理由とは何だろうか？いくつか考えられる。

一つは、監視される者に、権力に抗えない状態を自覚させる効果がある。つまり、立場が上の者が権力を誇示する方法なのである。下の者は、管理・監視されることへの拒否権がない。「テレワークなので」と監視されることを拒否すれば、「私は仕事をさぼります」と上の者に宣言しているかのように捉えられる。「コストを上回る利益があるはずだと、或いは、間違ったことをしていないのだから隠したり恐れたりするべきことではないと、そう考える」ため、人々は監視を受け入れるとライアンは述べる。つまり、自分に非がないことを監視が証明するし、監視の拒否は悪いことをしている間接的な証明になる。この権力による暴力的なまでの抵抗権の剥奪は、会社や目的に個人を縛りつける。

もう一つは、監視側である上の者の自己満足に過ぎない点である。事細かな監視により、下の者が監視者の思惑通りに動いているかどうかを確かめられる。会社の利益という大義の下に、個人の行動を全て監視する。プライバシー権の剥奪であるが、権力に抗えない一方的な状態では、下の者は従わざるをえない。

両者に共通しているのは、監視による一方的な権力構造の自覚と服従である。しかし、テレワークやリモートワークとは、本来は所属する企業や会社の権力を分散させ、服従ではなく自由を促し、ワークライフバ

ランス実現のための働き方ではないのだろうか。「リモートなのに、まるでタイムカードを押しているようだ」という現場の切実な声は、目的を勘違いした人間への訴えである。

では、なぜこのような本末転倒が生じたのか？

まずは、リモートワークやテレワークの利用、そしてオンラインコミュニケーションツールの使用理由と意味を理解していない日本人の態度が表面化したからではないだろうか。リモートワークもテレワークも上述のようにワークライフバランス向上のためにある。それを達成するには、就業時間や場所をある程度自由に選択できる権利が個人にないといけない。「自由に働いてもいいけれど、成果は出す」これが原則のはずである。単に「コロナで会社に来るのは良くないから」とリモートワークやテレワークを導入したところは、この原則まで理解せずに表面上行っているにすぎない。「監視用の人員が必要だ」という表現は、新手のユーモア以外考えられない。

さらに、「信頼の欠如」が監視側にはあるのではないだろうか。会社や企業側は、個人が成果さえ出せば、わざわざ仕事の進捗状況の一つ一つを覗くようなことをする必要はない。むしろ、非効率である。割かなくてもよいことに人材を無駄に配置しているからだ。

行為の理解不足と信頼の欠如が現代型パノプティコンの根底に流れている。それを、権力によって補うのである。バウマンの述べる「液状化して」、確固とした基準や倫理・道徳が揺らいでいる現代社会特有の現象かもしれない。

「現代型パノプティコン」は、現代日本人の行為の理解不足と信頼の欠如がもたらした怪物かもしれない。この監視行為は、監視される者を収監者と同様の地位にまで貶める行為である。確かに、心理学の研究では、監視や他人の目があると、人は利他的行動をより行うようになる(van Rompay et al., 2009)。

しかし、現代型パノプティコンの環境下で行われた利他的行為に、果たして意味があるのだろうか？ 本当にその人は利他的なのだろうか？

科学ではなく、哲学の問題である。

#### 参考文献

- バウマン(2009)『リキッド・モダニティ』大月書房  
ライアン(2002)『監視社会』青土社  
van Rompay et al. (2009). The Eye of the Camera: Effects of Security Cameras on Prosocial Behavior. *Environment and Behavior*, 41(1), 60-74.



## コロナ認識屹立を

香椎 幻州

唯研のコロナ危機特集号が対策としては、受難による弱者支援の後手対策に手を差し伸べる多くの組織の紹介に始まり、ウィルス史の蘊蓄や感想はあっても、どう対処するかの声はついに聞けなかった。パンデミックと云われ一年近く経つが、武漢に続く欧米の爆発的感染に恐れをなし、政治の腰が引けては国民は怯えるだけである。今こそ認識を屹立させるべきである。しかし、政府は対策として、マスクをし自粛することを勧めては経済支援に乗り出すマッチポンプの無策にある。冬に入ってから感染の急拡大に慌て、一都三県に亘る2月7日までの緊急事態宣言は、2月投与のワクチン待ちの神頼みを語り、野党はそれを遅きに失すると云うだけの無責任にある。

そうした中、マスクなしで歩くといきなり突き飛ばされ、マスクなしでの搭乗者に飛行機は緊急着陸し、その客を降ろし飛び立つ「マスクという踏み絵」が通る社会を生み出すに至った。しかし、私は欧米型の強毒ウィルスの中でマスクをしないトランプ支持者を断乎、支持する者ではなく、日本型のウィルスが弱毒と知ってからは、突き飛ばされないためにマスクをするので、マスクや自粛を呼びかけた政府対策が、ここまでいたずらに感染期を長引かせたと思ってきた。

ウィルスは自然的には感染しきらないと収束しないので、欧米型の強毒ウィルスならともかく、弱毒ウィルスの自然感染を促進して日本は抗体形成をはかる、インフル

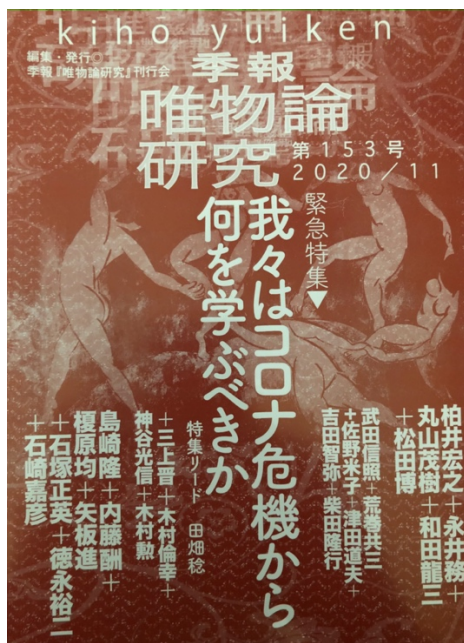
エンザ同様の普通生活を奨励し、健常者以外の基礎疾患患者や老人を守る政策に短観すべきとしてきた。それを健常者にまで自粛を強いたため、多くの企業倒産や失職者を生み、無駄な国庫支出を招いたのだ。政府が感染者数、重症者数、死者数の急激な拡大に動揺し、朝令暮改し、マスコミが日々、その感染拡大の数値を垂れ流す以上、国民が不安神経症に陥るのは必至である。それは政府も野党もマスコミも、その数値がどれほど空疎かを問題にできない認識に問題があるのだ。

PCR検査で、欧米では1個、日本では5個のウィルスが見つければ感染者とするため、そのほとんどが無症状感染者であるのは、ウィルス患者はおよそ一万个以上のウィルス保持者であるギャップが問題にされず、またWHOは癌、腎臓、肺、糖尿等の基礎疾患患者の病死に、ウィルスが一つでも見つければ、コロナ死とする通達を出している。この二つの数え方により、数値は異常に膨らみ、実体とかけ離れた数値が国民を恐怖に陥れている。「コロナが怖く、家でもマスクをしています」という年賀状に啞然とするばかりである。

かくのごときコロナ対策によって国民は不安と恐怖に晒されている。それは日本型の新型ウィルスの実体について、政府も野党もマスコミも数値に付和雷同し、それが飛沫感染によるのか、接触感染か、空気感染かについてさえ明確な説明をせず、国民以上に恐怖しては、国民が動揺するのは当然である。自粛による飲食店苛めを専らし、また通勤・通学でマスクをし押し黙って怯えている国民の不安の解消に気をはらうことさえできない政治にあるのだ。

日本型の弱毒ウィルスは、健常者は堪える抵抗力があり、抗体をつくるチャンスなので、今まで通りに生活することが抗体更新となり、新たな強毒ウィルスの予防形成となることをなぜ広報しないのか。自粛が抗体更生を妨げ、この冬季の感染拡大に拍車をかけているので、感染者数や死者数の実体はたかだかその十分の一以下でしかないことを認識し、それを早期に実行しなかった罰が、今の感染拡大で、オリンピック開催に固執し、下手な開催は、日本が猛毒変異ウィルスの感染舞台を用意することになりかねないのだ。

(2021.1.9)



季報『唯物論研究』購読ご希望の方は、kiho-yuiken@mbn.nifty.com までご連絡ください (定価 1200 円、年間購読 4 号 5000 円)。

## 日本の男たちの問題

細谷 実

最近考えていることの一つに、「ケア」がある。コロナとの関連も少しあるのかもしれない。

それが、「ケアの倫理学」として二〇世紀末に浮上した時には、こう思った——確かに正義の倫理が倫理学の主流だけど、共感・共苦の倫理という流れも、ショーペンハウアーにせよフォイエルバッハにせよあるわけで、それをジェンダーと結びつけて論じることにはどれほどの意義があるのか？と。フェミニズムの中でも、ケアの倫理を持ち上げる人々もいれば、男女の本質主義的見方に与するものだと批判的な人々もいた。

しかし、近年、ケアの政治学が、ジョアン・トロントや岡野八代らによって提唱されている。それは、ケアの倫理を、ケアの活動の処遇問題として、大きな政治の枠組みの中で見直す。そして、主権国家と主権者的個人の政治学 (つまりホブズ等の近代政治学) について、人類にとって不可欠で大切なケアという活動が無視あるいは (女性に押し付けることで) 無償の資源として前提することによって可能となっている理論であると批判する。つまり、ケアの活動を万人に配当することを目指し基礎とする政治学への転換を提起するものである。

これは、再生産 (出産・子育てと個人のメンテナンス) を無視した近代の経済学に対して人類の再生産の活動の重要性を提唱する文化人類学やマルクス経済学という対比と、似た話とも見ることができる。

特に日本について見れば、二〇世紀の高



度成長の時代に男たちは仕事人間になった。今、「イクメン」とか言って、ケアする男たち像が政府広報に載りメディアに流通するが、現実の差は大きい。確かに、近年、短時間イクメンになっている若いパパたちを目にする機会は増えてきた。しかし、データ的にはわずかな改善しか見られない。また七～八割の男子学生たちが「子育てにしっかり関わりたい」と言い始めているのも大きな変化だが、実際は難しいだろう。ヨーロッパの男たちのイクメン水準とは大きな差がある。それは、日本男児の本質的特性というわけではない。

二〇世紀終わりの四半世紀にヨーロッパで、男たちへの家族賃金が消滅し、多くの女たちも稼ぎ始めた。今、日本の男たちの家族賃金の消滅が進行しており、女たちの労働力率は上がっている。ここまでの流れは似ている。しかし、ここから先の流れが違ってくる。

その時点で、ヨーロッパの男たちは、家族的ケアをする生活時間を既に獲得していた。それは、一九世紀からのマッチョな労働組合による労働時間短縮要求、ILOの第1号条約(週四八時間労働制、一九一九年)、フランス人民戦線内閣の週四〇時間労働制や有給休暇制(一九三六年)など、先行する男たちの運動の成果を享受できたからである。

対して、日本の男たちは働くのが好きだったのか、職場に長居することが苦痛でなかったのか、短時間労働への要求は日本では弱かったし、当然未実現だった。そうした日本の過去の労働運動の負の遺産と、今なお二〇世紀後半モードな五〇歳以上の男たちによる職場マネジメントのせいで、若い

パパたちやその予備軍の希望は現実化できない。このことが、若い世代の男たちにとっての男性問題の中心にある。

日本において二一世紀にまで積み残されてきた労働時間短縮問題は、ケアの政治学の見えにくい課題である。



## コロナ禍で走る、考える

横井 伸祐

木津川のサイクリングロードを週に2～3回-往復40キロ程度-走っている。ボケ防止のため、県立図書館で毎月一回開催されている「古代大和史研究会」を聴講している。一昨年秋の台風で被災し半壊の認定を受け、取り壊す予定の大阪の実家の片づけも現在は控えており、買い物以外は引き籠り状態である。

自転車に乗るときは屋外であり、マスクを付けると息苦しいのでしていない。先輩方もしていないが、マスクは持参している。コロナに罹るといふより人に移さないのが大事というのがオールドサイクリストの一致した考えである。

「美しい国」というのはどなたかのスローガンであるが、長く日本に住まれている外国の人はそうじゃないと言われる。どこでも見られる光景と思われるが、川というか水路に樹が生えている。木津川も祝園付近の左岸に長年土砂が堆積し、右岸が削られてしまったので、漸く大規模な伐木及び浚渫作業を開始したが、狙い通り流れが変わるか見ものである。

さて、ここ5年間我が家は人口過密状態で、孫二人を含む4人はいなくなったけれど、そのすぐあとから今年96歳になる口も立つが悪運の強い（転んでオカシクなったので、引き取ったのは一昨年の夏である）実母を抱えている。小生はその母である祖母（馬山で旅館経営→上海）に育てられ、その影響をかなり受けているが、禁句として『日本人は利己主義』と教えられたが、その意味

するところがよくわからなかった。

3年前の年末亡くなった叔父が実家に残した7F・mにも及ぶ膨大な資料\*を整理しながら、行き着いた結論は小生を含めて『他人やライバルが何を知っているか、考えているかを考慮していない』勉強不足のタコツボの住人であるということである。

\* シール（パッキン及びガスケット）に関する資料であるが、その範囲はそれを使用している機器及びその業界の動きにも及んでいる。大半は日本の技術雑誌のコピーであるが、英文の科学技術文献速報もある。気胸という病を患いながら半分以上はファイリングしたが、科学技術文献速報に取り掛かった時点で挫折したようである。かねてから『知識は広く浅く、かつ専門は深く』というのが口癖であった。小生の同僚や知人にも、専門はゴムのシールだけとか金属のシールだけという人が大半である。

プーチンの「半々」発言は地図を拡げてみると、ホンネが見えてくる……？

明治維新ひいては古代史に興味を持ったのは、5年ほど前に県立図書館の書棚に「日本の本当の黒幕」(鬼塚英昭著)という本に偶然目が止まり、時を同じくしてネットに「新説・明治維新」の広告(この人を知っていますか—田中光顕の写真)を見て500円で購入したのが、最初となる。

この著者である西教授は在米で保守系の大学の研究者で研究対象は公文書である。発行元のダイレクト出版は毎日のようにメールが来るが、真珠湾とか満州とか参考になった情報も得られたので反面教師と考えて、維持している。—以前は西教授がオピニオンリーダーと信じていたが、最近は南信

出身の保守？系雑誌元編集長とか断捨離おばさんも登場するようになって広告塔かもと考えている。

現在「古代大和史研究会」では、聖徳太子のモデル=多利思北孤(たりしひこ)について連続講義が続いており、その人は天然痘で死亡したという。九州の王朝も天然痘で？

日本書紀には九州の王朝は出てこないし、出雲もどうして滅んだのか？ 下って明治にも坂本竜馬など謎がつきまとう、明治維新は相対化というより謎は謎として清算した方がよいのでは—今、分かっていることはこれこれです、一方これらはフィクションですと。

近くに安康天皇陵があり、住井すゑ氏が『奈良は造り物の世界』と云ったのを思い出す。

実家が被災して、祖父が上海で貿易商？をしていたというルーツを思い出し、明治以降の日本はシベリア出兵以降、戦略抜き、イケイケドンドンの拡張主義と認識している。

動き出した暴走列車は止まらないのを戦後の小生も会社で経験している。

暴走しない考え方、現実的かつ合理的な考え方を今後の世代に期待したいが、文科省そのものが、インチキの歴史を固持しているようでは……夢のまた夢

中国には全土を列強から解放したという神話が存在するため、コロナ下での統制が旨くいったのでしょう、これからは分からないが。

香港はかつての入り口だったから、是が非でも民主勢力を潰すでしょう。

2021/1/16

## コロナ禍での随想

井口 昇司

「空集合 $\emptyset$ はすべての集合Aの部分集合である」

はてそうであったか、そう定義したら後のいろんな論議がうまくいくからじゃなかったか、と思ったら、これは命題論からも導き出せるらしい。

「ある命題の対偶が正しければ元の命題も正しい」

「仮定Aが偽であるなら結論Bが真でも偽でも命題そのものは真になる」

空集合を改めて定義するまでもないとのことらしい。理で詰められるとなるほどと思ってしまうわけにはいかないが、日常生活で似た論法を使ったりしておかしいなと思ったりしたことがあるような気がして……ひっかかる。

コロナで暇なこの時に、積んである本、書類を整理しなければ。いつも思いながらそのままになっている。

ある本を開いたら上の問題に引っかかった。よせばいいのにあちこち探したりしていると「空集合の公理」なんて言葉もあるらしい。

大掃除の時に畳の下から出てきた去年の新聞を読み始めるという状況になって肝心のことが前に進まない。年齢とか能力気力とか種々あるけど、定年退職者の一典型かもしれない。

バイデン民主党政権が誕生すると日本に対して円安の是正をもとめてくるのでは

ないか。

目先 102-103 円のドルは 90 円台のドル安円高に進み日本の輸出産業は軒並み減益、株価は下落。大株主の日銀の信用は地に落ち……。

日本経済の崩壊が始まるのであるが、この手のシナリオは過去何回も繰り返され、その都度乗り越えられてきたとされる。今回もそうか。

アベノミクスが喧伝され、GPIF による ETF 購入、金利 0 %、日銀による国債・ETF 購入と異次元の金融緩和で金があふれ株価は回復し富裕層は潤った。庶民はおこぼれにあずかれず所得水準は横ばいか下落、GDP は伸びず一人当たり国民所得は順位を下げ下落の一途らしい。何を間違っているんだろう。

私のような年金生活者は物価が安定しているので生活水準の低下が抑えられ左団扇であるが(でもないか、適当な言葉が思い浮かばない)、コロナ禍もあり収入低下のみならず雇用の危機にある現役世代は生活のみならず生命の危機にさらされているようです。

本来現役の働き世代からの仕送りで生活が成り立っているはずの年金世代が大きな顔をして、若い世代が仕事がないと右往左往しなければならないのは不条理だ。死んだ労働による生きた労働の支配。

こうした事態を転換させるのはこういう若い世代である。「戦争が起こればいい」というようなタイトルの本を若い著者が著していたような記憶がある。なのに安倍内閣支持率は若い世代が高く 60 代以上が一番低いらしい。

MMT 理論なんてのがあってこれだけ国家債務が積みあがっても別段問題は生じないということらしい。

安倍政権発足時 2 年で 2 % のインフレを目標に始めた異次元の金融緩和、インフレは過去の失政を帳消しにする。目標達成できずに 1 年また 1 年と継続、効果がないからと引き締めを図るとそれこそ過去の負債が廻り大変な事態を招きかねない。

そのままズルズル、そのうちいくらでもバラまける打ち出の小槌を手に入れた気になったものだから、おこぼれにあずかりたい民間と権力をふるいたいお上、といった状態が現状ではないか。引き締めを考える人も着地点が見いだせない。ゾンビ企業の淘汰などではすまないのではないか。少しの異変で大変なことになる可能性がある。

本来貨幣と生産物は見合ったものでなければならぬ。貨幣への信頼の根拠はそこにあるのではないか。国家への信頼の底にも貨幣への信頼というものがあるような気がする。

この鎖が切れたとき社会はどうなるのか。

オイルショック、バブル崩壊、アジア金融危機、リーマンショック。金融機関がバタバタ倒れました。私の世代が経験したことです。

もっと大きなスパンでいうと大東亜戦争敗戦、ソ連解体、冷戦体制崩壊。

ソ連の時はルーブルが通用しなくなりマールボロが利用されたいらしい。

日本敗戦では物々交換、タケノコ生活なんて言葉がはやったそうです。

でもその後日本は奇跡の復活を遂げ農

地解放、主権在民、戦争放棄、基本的人権の確立と民主主義国家になるし、ナントカ景気で冷蔵庫・洗濯機と……。

戦争でご破算になってよかった、犠牲も払ったけど結果オーライ。国家は甦った。

それがよかったのかどうかは議論の余地があるかもしれないが、今日その結果が危機に瀕しているといえるのではないか。

「生きよ墮ちよ、その正当な手順の外に、真に人間を救い得る便利な近道が有りうるだろうか」

こんな状況にわれわれは陥るのであるうか。安吾 40 歳、この本を読んで励まされた人もその前後。当方 70 代。

「またリセットされる」、それを待っているような怖れているような。

「五月来る硝子のかなた森閑と嬰兒みなころされたるみどり」 塚本邦雄

イエスキリストの生誕を怖れたヘロデ王が国中の赤ん坊を殺させる、新約聖書の一場面を思い出しながら短歌に仕立て上げたものらしい (坂井修一)。

墮ちよ生きよの前にこういう事態を生じさせないために。

私は空集合の理論のようにどこか納得できない空論を述べているのだろうか。

## 私の Facebook の

### 取り組みについて

高根 英博

コロナ禍の新年です。大阪哲学学校も昨年から、活動が出来なくなりました。苦難が続きます。今回は、私の facebook の取り組みについて。現状、大阪哲学学校と facebook とのつながりがほぼありません。少しもつたいない気がしています。

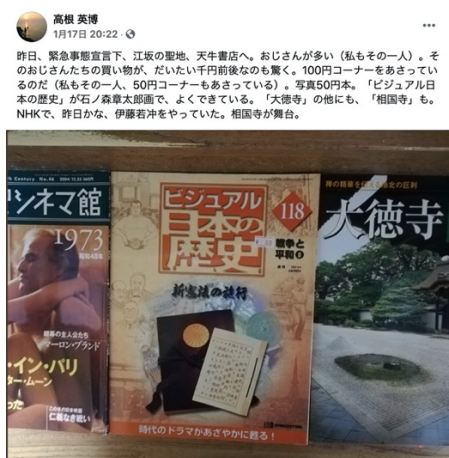
私の facebook とのつながりは、数年前から。当時ホームページをもったりしていましたが、突然そのサービスが停止になったりして、ネットでの発進には疑問がありました。今でもそうです。で、facebook のやり始めは、本名と簡単な経歴で、顔写真は入れず、誕生日入れず、家族・仕事情報はなしで、写真とそのコメントを書き入れ始めました。

それで中身的には、最初自分で作ったブックカバー写真紹介をしばらくしていましたが、ぼちぼちと、ほかの人の上げてくる情報のシェア(共有)をし始めました。さらに、こちらの方が重要なのですが、私の日々の日記や、備忘録、勉強資料なんかを上げて、ストックすることも、し始めました。いまや、私のストックしたデータの保管場所で重宝していますし、めぼしい人とのやりとりや、資料交換をしています。いまでは、facebook が貴重な保管室になっています。みなさんも参加されてはと思っています。

ただ大阪哲学学校の方々の参加が少なく、その関連がなかなかありません。facebook との相性もあって、学校の一つの機能として使うべきなのかどうか、よくわ

かりません。

とりあえず、私の個人的な、ストックと発信場所として利用していますので、報告させていただきました。その中で、facebook そのものには、警戒もしながら、社会的な発言にころがけています。「君が代・日の丸」反対、天皇制への疑問、政治評論などです。最近、季報唯研にも書かせていただいた、市民社会論なども社会運動と関連づけながら、この場でも発信しています。制作した私自身の作品も上げることがあります。機会があれば、のぞいてみてください。



(高根さんの最近の Facebook より)

## 癌手術体験記

川勝 博史

2020年の7月に健康診断を受けて、返ってきた結果票の用紙を見ると、その胸部 X線の欄に、「浸潤・要精検」という表記が目に入ってきた。

まず、掛かりつけの呼吸器クリニックへ行き、医師に健康診断の結果を見せると、詳しい検査の必要ありということで、別の病院を紹介してもらい CT 検査を受けた。その CT 画像を掛かりつけの医師に見てもらうと、「これは手術ですね」という言葉が返ってきた。何かそういうことも全く想定外ではなかったとしても、面前ではつきり言われると、「えっ」という感情が湧くものである。これ以降、自分の命のカウントダウンというものが意識されるようになった。自分の死について具体的に考えるようになった。

入院までに、既に済ませた CT 検査以外に、更に幾つかの検査を受けた。心電図や呼吸機能検査に加えてペット検査、気管支鏡検査による細胞診、MRI 検査が行われた。手術の前にこんなに検査するのかというのが実感であった。これらの検査は、主に、癌の他臓器への転移を診断するためのものであるが、結果、転移は無さそうであった。検査を行った病院には、呼吸器外科医が不在であったので、神戸大学病院を紹介してもらった。

2020年の9月においては、手術を行う前に新型コロナウイルスの PCR 検査を受けることは当然の要請となっていた。コロナ感染には、自分なりに気をつけていたもの

の、もし陽性なら手術が延期されるだろうと考えると不安は募った。癌は放置すると確実に転移し、致死の度合が倍増していく病である。唾液によるPCR検査の結果は幸い陰性であり、手術が可能となった。この時、全国と同じ不安を抱える人、不安が現実になった人のことを考えると、コロナ禍が他の疾病の医療行為に与える悪影響がいかにか身にものして体験した次第である。

病巣の疑いがあったのは、肺の左下辺りであったが、その診断が出て以来、その辺りに、しばしば注意と知覚が集中するようになった。痛みというほどではないが、違和感、不快感がしばしば伴うようになった。「病は気から」という言葉を想起させる現象だが、「気」というのは単なる「気のせい」ということではないだろう。昼間の活動中は注意が分散しているので、さほどでもないが、就寝中は特に悩まされた。

手術は、全身麻酔と硬膜外麻酔を施された後、ロボット（ダ・ヴィンチ）支援による胸腔鏡下で行われた。当然のことながら、麻酔がかけられる直前までのことしか覚えていない。

麻酔をかけられた内面の自意識の状態は死のそれ（この言い方は矛盾を含んでいるが）と非常に似ているのではないかと考えられる。知覚も思考も一切ないからである。ただ、違うのは麻酔状態には目覚めが訪れ、死にはその訪れが無いということと、外部から眺めた場合、麻酔の掛けられた身体には命が宿っているが、死した身体にはそれが宿っていないということである。

手術後の一晩をICU（集中治療室）で過ごした時が一番苦しかった。呼吸のし辛さ、手術傷の痛み、皮膚の痒み、腰部位の不快感

と痛み（私は腰痛持ちである）、身動きの取れなさ、点滴や人工呼吸器、酸素マスク、心電図モニター、カテーテル（尿を出すための管）、排液を出すためのドレーンのチューブに繋がれたいわゆるスパゲティ状態、更に、手術後の血栓防止のために装着された弾性ストッキングによって、極度に自由を封じられていたからである。麻酔は既に覚めていて、ベッドに横たわった状態で、その不自由が自覚されることが、その不自由の意識を更に強化することになった。

しかし、これらの処置はすべて身体のリハビリを援助するために必要とされるものである。徐々に不自由から解放されていく。入院中によく耳にした「日にち薬」が効いてくるのである。とは言え、現代社会でごく普通の生活を送っている者が、これほどの身体的不自由を被ることはまずないので、手術の体験の大変さが実感された。

正確な癌の診断というのは、疑いのある細胞を取り出して、顕微鏡で詳しく調べる生検（バイオプシー）によってなされるので、転移がなければ手術以前の診断は「癌の疑い」という言い方をすることが多い。退院後、詳しい生検の結果を主治医から伝えられた。癌の「疑い」は消えて、肺腺癌の初期のステージであることがはっきりした。癌が存在する部位と転移の可能性のあるリンパの箇所を取り去る手術が行われた訳である。今は、「根治」の可能性を期待して、日々の生活を送っている状態である。

自分が癌になって、癌に関する本を何冊か読んだ。その中で、スティーブ・ジョブズについての文章が印象に残っている。彼は、現代のIT技術に革命的な進展をもたらした企業家だが、癌という病への対処という

点では、私たちに大きな教訓を残してくれた人物でないかと思う。彼は初めて膵臓の癌の罹患を告げられた時、外科的治療の提案を退けて、ハリ治療などの東洋的な代替医療に執着したらしい。そのせいで彼の癌は進行し、結果的に転移が拡散してしまったようだ。彼には西洋医学への不信や東洋的な神秘主義への親和があったのではないかと思う。

ジョブズは、IT技術者・企業家としては、独創的で天才的な人物であったが、自らの病に対しては、結果的に誤った判断をしてしまったのではないかと思うのである。代替医療をすべて否定する訳ではないが、彼の場合、癌が発見された直後に外科手術を受けていれば、その天才は、もう少し長くこの世に存在しえたのではないだろうか。彼の中に、西洋医学への一種の思い込みがあったのなら、彼の技術的営為が、思い込み的思考、習慣的思考を乗り越えるところから達成されたことを考える時、本当に残念でならない。しかしながら、常に必ず適切な判断を下せるとは限らないのが人間である。その意味では、天才ジョブズも一人の人間であったということであろう。

ジョブズは、外科手術を遅らせてしまったことを後に悔いたようだが、命によって様々な活動が可能になっていることを考えれば、頷ける話である。私自身も今自分が普通に生きていることを考えると、入院中にお世話になったすべてのスタッフに対する感謝と自分の死がしばらくは遠ざけられたことへの喜びを深く感じずにはいられない。一日一日を大切に、生々と暮らして行きたいと考えているこの頃である。

## 死を意識する時代

水谷 忠央

この数年間は、「誰もが死を意識した時代」だと言える。

新型コロナウイルスの蔓延により、特に高齢者や基礎疾患をお持ちの方には、死と隣り合わせの状態が続いた年でもある。また、新型コロナウイルスによって、友人や家族を亡くされた方は大勢いる。罹患者ではなくても、死に直面せざるを得ない数年間である。

極めつけは、お笑い芸人の志村けんさんが、この未知のウイルスにより命を失ったことである。この報道を聞いて悲しみを覚えなかった国民は果たしているのだろうか？ 普段テレビで目にしていた方が、突然いなくなる。その無情な事実が、人類にウイルスとの戦いをなおのこと決意させ、危機感とともにウイルスを広めないことを誓った。

しかし、実際はどうであろうか？ 誰もが知る国民的スターの死がまるでなかったかのように愚策を続ける政府。飛沫を恐れずにドンチャン騒ぎを起こす宴会や会食の数々。これらのニュースを聞くたびに、人の死を教訓としてきた人類の英知は失われたのかと思った。残ったのは、十万円と安い布マスク二枚。

果たして、他人の死とはそれほどまでに軽いものなのだろうか？ 現代人には、見ず知らずの他人を偲ぶことは難しすぎるのだろうか？ 少なくとも、今の政府の対応を見る限り、他人の死の意味が遺体とともに燃えてなくなってしまうかのようだ。



私事ですが、大晦日と元旦の前後二週間で祖父と祖母の両方を亡くしました。新型コロナウイルスではなく、老衰による死である。幼い頃から好んでくれた祖父母に立て続けに襲った死は、私の心に深い傷を残していった。祖父母から受けた愛情と思いは一生忘れない。傷はいつか癒えるが、二人の死の事実と思いは私が生きている限り残り続ける。

ジャンケレヴィッチは、前者の自分と直接関係のない他者の死を「第三人称の死」と呼び、後者の自分の親類の死を「第二人称の死」と『死』の中で述べている。彼の名著『死』は、今の時代では無視できない。さらに、「第一人称の死」もある。これは、私自身の死のことである。私自身の死は誰にとっても代わることができない特別な死である。それゆえ、ジャンケレヴィッチは、第一人称の死は、第二人称、第三人称の死の体験とは別次元だと主張する。

確かに、彼の言うことは一理ある。第二人称、第三人称の死も、死を体験するのは私ではなく他者である。私は他者にはなれない。第一人称と第二人称—第三人称の死の間には大きな断絶がある。体験できないことの巨大な溝である。

しかし、人間には、たとえ他者の死を完全に理解できなくても、他者を思いやる共感性と「死とは何か」「死ぬとどうなるか」を考える想像力がある。だからこそ、死に直面する他者の苦悩をある程度は分かるし、死んだ者の無念さに思いを馳せることもできる。このように、他者の死をまるで自分事のように思えるからこそ、他人の死から教訓を得たり、学んだりできるのではないだろうか。

ハイデガーは『存在と時間』で死をかなり重視している。現存在である我々は、「死への存在」として規定されている。しかし、死への日常的存在（普段の我々）は、「死からの絶え間ない逃走」をしており、「終わりへの存在は、解釈し直されて非本来的に了解し蔽っている、死からの回避という様態をもって」いる。死への存在を理解しながらも、その死について向き合わずに生きているのである。この原因の一つとして、ハイデガーは、「生起する出来事としての死亡することが『たんに』経験的に『だけ』確実であるということが、死の確実性を決定するのではない」ことを指摘している。ハイデガーは非本来的な存在と考えるが、単に経験的に「死はあるよね」と死ぬことから目を逸らす人間を戒めているとも言えるだろう。この違いは、死を意識しているかどうかであり、絶えず聞こえてくる死の呼び声に耳を傾けているかどうかによる。まさに、ジャンケレヴィッチの言う第一人称の死を意識していることこそ、ハイデガーの言う本来的な人間の生き方（存在）なのである。

でも、ジャンケレヴィッチもハイデガーも、死を自覚した本人のみに焦点を当てているため、私の問いには答えてくれない。つまり、死を意識した本人は、その自覚の有無で生き方は変わるけれども、他者の死を自己の生に関係づけてはいない。死は自分の死ではなく、圧倒的に他者の死と直面することが多い。ここに死の哲学の役割はあるはずである。

第一人称、第二人称、第三人称と死の他者性が増すにつれて、我々に残る死の刻印は薄くなる。この刻印を深めるのは、共感性と想像力による「死の自分事化」にほかならな

い。死を「所詮、他者の死だ」と他人事に考えていては、他者の死の教訓も風化する。他者の「死」自体には共感も想像もできないが、死に直面する当事者の立場を自分事のように感じることはできる。

死に意味を見出せるのは生きている者のみである。その意味を生かすも殺すも生者にある。人生でも人間社会でも、善くすることができるのは、死者のメッセージを受けた我々にしかない。

### 参考文献

ジャンケレヴィッチ(1978)『死』みすず書房  
 ハイデガー(2007)『存在と時間(中)』岩波書店



大阪哲学学校編『生きる場からの哲学入門』を、著者割引価格(1900円)でご購入いただけます。+送料200円で郵送もいたしますので、ご希望の方は oisp@mac.com まで送付先をご連絡ください。

## 小林秀雄の美的体験

—カントの『判断力批判』による解釈

義積 弘幸

### 1 趣味判断は美[直感]的である

ここで、小林秀雄の『ゴッホの手紙』から『モーツァルト』を書くきっかけになった体験を語った部分を引用してみよう。

「空には黒い雲が走り、灰色の海は一面に三角波を作って泡立っていた。新緑に覆われた半島は、昨夜の雨滴を満載し、大きく呼吸している様に見え、海の方から間断なくやって来る白い雲の断片に肌を撫でられ、海に向かって徐々に動く様に見えた。僕は、その時、モーツァルトの音楽の精巧明晰な形式で一杯になった精神で、この無定形な自然を見詰めていたに相違ない。」

これは緊張感はあるが、自然の描写にすぎない。問題は、その次だ。

「突然、感動が来た。もはや音楽はレコードからやって来るのではなかった。海の方から、山の方からやって来た。そして其処に音楽史的時間とは何の関係もない、聴覚的宇宙が実存するのをまざまざと見る様に感じ、同時に凡そ音楽美学というものの観念上の限界が突破された様に感じた。」

(『ゴッホの手紙』序)

これこそ、カントの『判断力批判』(檜山欽四郎訳)の「第一篇 美[直感]的判断力の分析論 第一章 美の分析論」の「1 趣味判断は美[直感]的である」ということに該当するのではないだろうか。

ゴッホの「鴉の群れ飛ぶ麦畑」という絵画(複製)を、小林が見て、感動した時もそうだった。「僕が一枚の絵を鑑賞していたとい

う事は、余り確かではない。寧ろ、僕は、或る一つの巨きな眼に見据えられ、動けずにいた様に思われる」と書いている。(同前)

2 美しいものとは、概念をはなれて、普遍的な満足の客体として表象せられる

次も、小林秀雄の例であるが、「無常といふ事」の一節である。

「突然、この短文(『一言芳談抄』の一節)が、当時の絵巻物の残欠でも見る様な風に心に浮かび、文の節切が、まるで古びた絵の細勁な描線を辿る様に心に滲みわたった。」

この部分は、「1 趣味判断は美[直感]的である」にもあたるであろうが、異なるのは、次のような部分が、付け加わっていることである。

「そんな経験は、はじめてなので、ひどく心が動き、坂本で蕎麦を喰っている間も、あやしい思いがしつづけた。あの時、自分は何を感じ、何を考えていたのだろうか、今になってそれがしきりに気にかかる。」と述べている。けれども、いくら思い出そうとしても、できなかった。しかし、小林は「僕は押されるままに、別段反抗はしない。そういう〈美学の萌芽と呼ぶべき状態〉に、少しも疑わしい性質を見付け出す事が出来ないからである。だが、僕は決して〈美学〉には行き着かない。」(〈 〉・義積)とも言う。

つまり、小林は、この状態において、「概念からはなれて」、ただ「美学の萌芽と呼ぶべき状態」にとどまって、「普遍的な満足」を味わっていたのではないだろうか。

また「2 趣味判断を規定する満足は一切の関心を離れている」、「8 満足の普遍性は趣味判断にあっては単に主観的なものとし

て表象される」というテーゼもある。

上記のような瞬間的な短い小林の「直接的な美的体験」に、私は小林秀雄の「生々しい美的体験」があるといってもいいと思う。青山二郎に「雪舟の絵の本質のあと先に純粹の模様がついているというふうな名文句などがつかない」ほうがいいと言われたり、坂口安吾に「小林さんは非常に観念と協力している美術鑑賞家だと思う」とか批判されるようなところ(以上、『小林秀雄対談集・講談社文芸文庫』)は、上記の部分にはないのではないかと思われる。

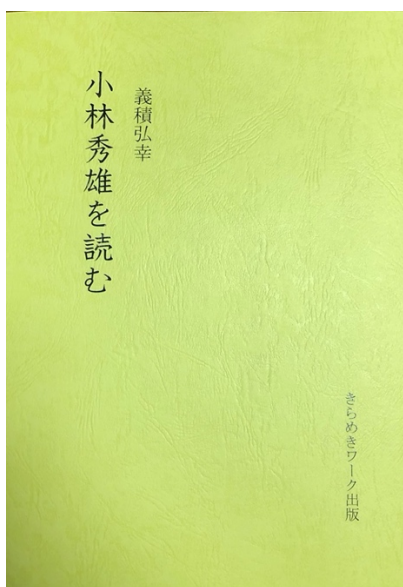
カントは哲学者であるが、この小林秀雄の「美的体験の内的感動」の生々しい表現をうまくすくいあげていると思う。私は四十年ほど前、小林の「美的感動」をどうとらえたらいいのかわからなかったのであるが、やっとカントの『判断力批判』(同前)の「第一篇 美[直感]的判断力の分析論」によって見事な解釈を提示してくれたという感じがした。これこそ真の哲学者の仕事と言っていいであろう。

ところで、私とカントとの出会いは『啓蒙とは何か』(篠田英雄訳、岩波文庫)の同名論文であった。私が「哲学」という専門的な学問に本当に出逢ったと感じたのは、このずっと以前の田畑稔さんの注釈によって参加者と一緒に読んだ時の「啓蒙とは何か」という文章ではなかったかと思う。

それから主著としては『判断力批判』(同前)を読んだのであった。そして、「第一篇 美[直感]的判断力の分析論」はまさに人間の「美的体験」を正確に考察している論文だと感心したのであった。私たちはヘーゲルの『精神現象学』(梶山欽四郎訳)も読んだことがあるが、私にはよくわからなかった。

これも相性というものかもしれないと思う。

私は続いて『実践理性批判』（坂田徳雄訳）、今『純粹理性批判』（原佑、平凡社）を読んでいるが、読んでいるというより、ただ傍線を引いているだけで、ほとんど理解できていないのだが、カントを読むことはなんとなく楽しいのである。私にとっては哲学者としてはキルケゴールに次ぐ人間的魅力をもった哲学者と言えるだろう。



本誌「小林秀雄の美的体験」と同じ表題の小論（内容はやや異なる）を含め、小林秀雄について書かれたものを集めた冊子『小林秀雄を読む』を義積さんが刊行されました（2020年12月25日、きらめきワーク出版、定価500円）。購読ご希望の方は哲学学校で取り継ぎしますので、oisip@mac.comにご連絡ください。

#### 【編集後記】

◆「大阪哲学学校通信」は、哲学学校会員・参加者の交流誌として2015年の第47号まで紙媒体で製作・発行していました。2003年の第23号からの「通信」を、哲学学校のホームページにpdfファイルにしてアップしていません（一部欠）。しかし、文章を書くことのハードルは思ったより高かったようで、次第に寄稿者が少なくまた限定されるようになったことから、発行休止になっていました。

◆今回、コロナ禍で休校中だった哲学学校の活動を再開させる端緒として、印刷一折込一郵送という手間と費用を省いたWEB版で「通信」を発行してはどうかということになり、年末になってからですが寄稿を呼びかけたところ、予想以上に多くの方から原稿を寄せていただきました。まずは本号執筆者のみなさまに心より感謝を申し上げます。

◆特にテーマ等は決めず自由に書いてくださるようお願いしましたが、やはりコロナ禍と直接あるいは間接に関係したものが多くあり、さらにこの間の読書体験や実体験をもとにした思索など、いずれもそれらを出発点にいろいろ議論が起こるのではないかと思われるような、問題提起的な内容です。もし読まれたみなさまからコメントや新たな原稿をいただければ、WEB「通信」の継続的発行につなげ、交流を広げていけると思いますので、ぜひご検討ください。

◆表紙で触れたりリモート哲学学校についても、講演を流すだけならすぐにでもできるのですが、「対話」の部分はどうすればよいのか、この「通信」との連動やFacebookなどSNSの利用可能性なども考えながら、実現に向けて動き出そうと思います。試行錯誤する哲学学校にご助力をよろしく申し上げます。（平等）